厭蝕太平樂記

拾四

へ13
3553
14

厭蝕太平樂記巻十四

目録

一 幸村五ヶ所より伏兵起る事
附り 大平次奮戰強る事
一 伊達陸奥守和久宗直つゝ生捕る事
附り 牧嶋南条五郎忠の事
一 東軍勢攻大坂軍の事
附り 大將南部へ義たのまる事

門へ13
號 3553
巻 14
早稲田大學図書館
昭 33.11.10 受
藏書

厭蝕大平樂記巻十四

幸村五ヶ所上伏勢の事

防り花を安れ樂を給ふ

東軍勢のめくる打はけしかど神君かも
却ぞろきのうとゞ合戦の内ハ緣頁ハ籠ゐも
あり内城方ハ大坂の緣軍を收びていの
ある笑田なりとも勢を出ぬるハ何るまゞ
我内ハ体まうしてせむ出きみをさ
づきなさんとて内ゐ一向味方ゐ沙

なり陣まゐりの出用意ありて山田幸村
八幡軍注報じて出あく戻りて急ぎ注軍
をあつめてまゐりけをなりしれい宍山助
左月郎右衛門詞をおく東軍はるくしよ破れ
らるるなれい中くに明るまで出ぎやう
なりいなまで傷ふまなりのふるなれば
幸村はけふ八今は陣まゐり仕そんたきん
極めて明るい大勢びまわりをきぐし
をふ知らちこぐんと夢よりて宍山左月

川後林根は五人よ百余りづをあつて
天満の地面の花の中ふ伏ををもくり
きりの名知るこうして八十余騎出れを出て
中の時の方つて出行明まい北の多勢
美濃山ひとぐと伊吉の方へと出行陣ふ出い
陣雲物なりて出のふ右同根の雲物三挺たる
本三百人ばは知ちせる後して静ふ道行ふ
陣岩の方の西い伏しる兵庫時をぐつと作
まて六文銭の旗を記ひらめくしに田左衛門

こまをみまもりゐるね者ども縁側あまてゝ
ゐまでとりやゝ伏勢こいしをとうろくまわり
防んとするこのなく元ちまをちよぐつと責よせ
て打てゝるこだん目の豪物の大久保長
まつ兵でいでまるよ打せ一騎ばかりゐ
おめきてかゝる幸村馬の上の騎を合せ
いろゞ和もひらん豪ちぐくて引退く大久保
いづ〳〵退しと騎をあつて退かくるゐたる
ゝとの人ぬいゐる指人防かつできてもり

こうり笠田とこせしい相手葛八郎の勢ゐ
ゐけん弱の計略ゐれい住吉の濱く一さん
よ退く男兵の毎ゐ高ゐて八十時かくれて
引よりゐ住吉ゐ伊達政宗体ゐて飛こう
しが時の声よおどろき勢ゐ引て出ものい
ハ公のゝ陣海わりうて陸よさゝる伏勢ゐ
かゐくこうとゐちとゐ兵ゐ遮ちゝさんとて
ゐまもしくともせ出る伊達の新くゆま
防きまゐ供して真根崎の方くまわゝせ

めよ此時大将の御陣屋ばかり一面に焼たる
のみにあらず味方の兵多の者ども
云ハせてごとくをちさせのふされどとぞ出田
げ物の侍ふ者ども取せてそ物の
兼毒ふ物でなり伏勢ねこ者村こまるみ
ゆりとて高ほ此方さぎてかるいぼませ
ちふうろくせひちく常に拵てふせぎ
戦ひの世月川縁を田ろを白旗を出立
て拵をつるひさんじ実立れ討る者

勢をもつて指向ふ府方からもり
討死をとげたり三陣の高物を雪
後して中の嶋の方に供をふるよみや
宿山林が毒勢ばかりこまで出て方の府を討
よ待情たりのがまぬ拵ばかきやてぼわ
まして無二無三にかくるとり今ハ陣を取
をべきやうもあきまして二度のり物
拵て逃てとりたまに出田勢方物をかくん
とまるふつ拵の京物が取出せる方勢

こまをよりをさめ田の見物せんとおもひてうろう
宮山へはうらと神をかせて立だてゝく強い
しゝぶ南の方い三ぐんがり退きたりおの
がさゝと追うくるこまがのうたて本林松防き
討死したりそ陳よ公を助けもり酒井雅
楽助忠次人馬をとゝ松村く近入ふ
御ふる人の伏勢いづまも同振の装束ゝて
先田と名乗りしゝ田くさうそのう義本も芝地
おそれて言ふおいて市例ふ生そふその

なく先田が計略の為ふ大将たぎう武
者ふなりうゆくうゝ酒井大左村く出供
しゝり先田安村もるかふて生ふ来ふ迫
をさくぎゝ世九人の強松ゝて言をおぐゝ世
追うけうゝ公ハ河ひおそれのひ酒井忠
とも序ゝぐの小ふ近迫たるひ志ゝく勢
かくしゝ世てと仰ふ条の豆左平次
心ゝのみこんでしらんのごゝなぜゝ
面目ぜうゝてかくし知るべき不ゝそのの

このりふ脱くもつのうくといつぐる急それい
せんかくたくて美のりよ隠きのふ酒井
ひぎと表ふ出て他の家の門ふ立舞をまう
たる事つ厚女村ハ大そちちまで高ゆけ
おれ足くのうぎうくの家の家よ酒井只
きくひうくりあい併迫迫ーあくんと
美きをうがいたまぎもくくれ明ちるかな
おれいすのこのりふかくまのいて左平次
よふ屋ーぬくゆく芸きまくざうまり

女村いふーぎまひさそ訪ぬぬあい
かけ通ども いまぐ運のつきびとくへくう
うーーかはいのぐまとかさもてあるじ
と知ないた言上ケて家ら軍略よのくまて訪
まで知ったあたまとを知ってうちとる
ハ安ちまとも弱者の物見をのそむなのう
かくはみうぎくずさいくひ知のそむ知女
出を見るもせきくりて酒井とちとる敵知防
がんとれ女村がまの者五拾騎余りを毛分

訪人をうしなんとはかりて新してもや
はうるまちまきかれ〳〵ハこのごろの名はれるすハ
おとろかけなり〳〵おろかふかんじて捨おく
ゞ〳〵とまの若ひきゞ〳〵引うすか布酒井ハ
むれんおもへども丹もこうふぐきやうの
大物を下臣か出〳〵奉を出ず
奉りて大久保彦左衛つ紛失ぬ
ちせ事り南光坊ハ出見訪ふ新参りて大を
村ふ家付て夫か出左ふ徒ふ法ふ

られもくと大勢うて来くり出後しふ体へ
ろうせのふ酒井ハ亭ふ左平次よ一礼のゞて
進ゞかうびをうせんと色ハ南蛮の物ふの
るれりと若せ〳〵金紋の甕ぬぎて下さまを
なまて夫か出ハ家の宝物とかうかほゞの動戦
ようせを体くふ勢ふ体巡り出ふ
せざるゆつなり夫左衛
左おつ法ふ〳〵めうく書名物ふり城中ふ
ろうよ敵ふ出ぶり上下拾びいさめむよせを

親をうしなうたるなり　なのひなげきうなひ
かなしびどのを始めとして　和泉式部のあん
内侍殿　こと〳〵く　第四山の法体所よりも
がり　恐まつて　内裏　住る　公ののるくいづ
まし　所は　皇居　不　あり〳〵なり　さるまでも
事が　遅天　ふうなり　やはり　やうきも　安く　法ろふ
猶　利　法　こと　何のうとびあんあの〳〵
陣郷の　乱をこそ　ばち　行　まをきう　ふく　陣屋
弧　級　れよおの〳〵　承り　退　陣して　町　乱を

こそ　ばち　陣屋を　作る　扨　生田　は　田ちは　和紀
為　家の　陣　内　あつて　為軍の　内　ずがわり
よ立　天代　う　首　塚　方　内　羽　弧　そつて　おまを
おきしたりと　云上　を　公別　とう　を　させて　の　弟
あつて　内　首　涙　ふ　おを　ず　ぬ　ひ　一　ちふ　ちふ
むり　そう　ふ　強　陣　ふ　よ　内　れて　てあされる　れ
世四　ふ　対　死　の　ふ　強　ば　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
たり　公　おば　め　を　ば　城中　の　十方　の　軍　長
あを　ば　集　り　勢　と　い　〳〵　陣　報　の　志　ある　者　ま　い

あるをあやまりて五十騎の者ども
ぞと思あなどりて柳原式部丞俊行
矢文を射てせめ寄せ帥判の書状を
ひ時協同よりする者ども
うけ合せてかしこをちぐりとぢ
ひ合るゝひまうて帥動状下さるゝ
中上たる多兵を討るゝ
敵俊行つまてる家康をうて
せひ討とめ奮んとせ
之第あゝ俊行て責込ゝ味方の兵
皆自頁より皆ん金秋のごとくあまでもを時
見もてみるつまかるわすして引くも
あゝはをき次第ゝてもるを
中上る和るゝ星合の書状南条中務丞
保倉口の西阪牧嶋宮元友人軍師常村が
あるあて矢文来りは出同ふかけとしみる
常村が回うゝ中原を通りよくもおそれ
ゝり敵方かひ原口元もゝき兵を引入たゝば

十万石の知行第よ南座のほうひとして金
る百姓をトさうゑ無用とみてり奥ふ公の市判
ゑり敬ふかゆのるハ内なり孫兵の
通り一ていよ生ときるゞ〜とて秀頼公像
利の陰い砂千万石の領知をトさうゞ〜と
上南座のわうびとして金子四百姓ばく
を毒人よトされうり毒人曰秀頼一命ゆさ
よるゞ公金子伺ふ仕ゑゞきふ〜の功ある者
よ生ときうゞ〜と通ゑ生村が曰く敵の計

よ仕て敵を計ゞ〜先君陸奥守政宗
市乱の市ゆ考ゆきうめるて此市使よい和久人
市乱事つよ考くハ市乱此使つとゑ
ゑ久和久いがうぜんとしてうこまるなる
と信合生村いうて考かゞ〜で元元金紙そて
毒ふ庶ずゞ〜政宗宗て此口ゆきく君ふ書
とせうふ呂下よ縄を急て栗田山へ引魚一
そ時うゆうくよとうしい毒条牧呼ゆを
ゆすゞ〜それゑて法ゆ如紙すゞ〜

とりて三面に流せば和人は清れ和て身
けゝの苔汁を首ふりけ出ぬが出て汁を
村い南條牧時ふ流をさゞけてみる人ふ米
の四きくを多ひ地流すいるるしひき
て流ひふ汁脇をさゝ色て和人ゝ脇るふ
まうを雲月廿六はの夜るう

伊達信夫わ人まるつを捕るす
詠り南條牧時詠りおのるす
公をたゞめ流ひ伊とぞまゞを出米よ

りーとゝをくぐき所のうふ和ふ伊達色
政宗の陣屋ゝ廿八日の夜味方ふたのき
ありてゝをを出てこふ日ふうゝ切あるよ
おいてゝ奥州一番ちさる一し政宗大ふ
いうてあゝ秀乳公ハ亀ひなり乳苦
大関ふ西沿ちめゝまてーをうみかゝふ
たつぐ伊ゆくふ味方をぐきそれるわ
うけふてゆゞて尾をかけまゝ和人ふ
いうふ政宗味方せず陽をふをぐゝ

とれば弘名うちみいくさ名をいはるるそ迷ふ
ふとかすみ山むらくもくまなきるやうに
おいまきたりつる政宗のいくさおのれ
ごときの右ちきしゆるするのあるべき
ぬをれ引立とりて和久をつれて
筑紫の山の出陣所ふ引たるをでゝ体
ちくいとり永井右馬助をして城をを
ぶとりて云いそぎ出陣の屋ふ引べしと
てうぐる燭奉行のごとくこゝやして海

和久を引立て来る云ふうひてあい
ちんじ小弟氏政の家来和久はたらい
ていちのきの和久筑紫にて曰く当り云の
いてくちんじ軍が勝ちあり稲と
の兵口をもきて来られあるつさく敵の
勢和久ふつくくなる又使つとそるる
何るぞ和久がいりくあ氏おあし
ちうとも知行をわがひたるふ古大内
ハ筑紫の新家をうけそとて天下のまた

こゝまでも内藤は御自分にみだれされ
て太閤に敵對し領せらるゝ所の主を
うしなひあまつさへ切ぶくいたし
さまでなすこともなく御自分の御方便
それに太閤は河州において一万石氏
あたへられけるは是厚恩たるに依て
今秀頼公に仕へて忠義を盡しは
ありし志れともかし又そんなる謀叛あそ
政宗の陣へ来るやうに只今ハ和久

をいだされしは上にていかなる事天下
銭の高のごとく仰られしぞ公の御
敵の仕へらるゝに何ごとかある筈し
奥州へまゐりけるなり其節の庵
に仕置くへし政宗を征伏して悦び
ありそのうちとて引入る和久太夫の
此陣に柳原式部はありきりおもいし海さ
ばいやといふに柳原是等にありいちの
身は聞ずやといふ和久はいらく足下

一昨夜保倉に一矢を射こまふるま
ゐてゆきるのいはれ
ゐるとゝふ句偏おぼくあるるなれば
よびこゝして拾をとらふふ志びこま
屋にて紙ぞたるなゝいつべきやうとが
懐中をこゝろとゝ刑南条牧鳴ゐがあと
又柳原ゐがぜさせしら矢文ゐをば
を云上さを公ハよびゐ句せてるの拾ゐの
たづゐをれゐ柳原ゐハそれゐるとゝけと

やけとゝ門ゐるとゝ拾とゝうゐなまたゐ
とぶめてこまを政宗のかけゐるゐわし
政宗まゐてとゝけとゝいつべぜひゐるく
政もれゐゐるゐ志用ゐゐとゝいふふ
志ゐふゐるとゝけゝゆく今ゐふとゐす
いふゐ句ふゐくおのれが獄の物を弱
まゐそのゐまゐふをゐとゐてゐつ体
ゐのゐんのゐふゐゐゐる和文ゐいとく
ゐふにてゐときゐく途中ゐわ紙まそ

心きいてこゝろの和ひらけてうつくしく
写書いてゝたるすがたいとゝ麁ぐり
をしきまたうつくしの上よこざしていく
政むわふまぢき引えてきて葛ぶ
空姫くろう仍て云上ちうぐく色湯
ばけをかうゝ一とのぞむ外出れゝこぜ
んまで食て酒をこうてこだいのこて
そは長生てゝ此状をば柳ふみのよ
うとゝいふ康政これをてゝいるゆ

これいこゝろ陳ようすがたるべ状
なう和久ゝいうく保者口の大物をば
南条中務の大夫とゝ此ちくうゝて
幸村とゝ映ふしてうゝみいゆ母は
て和知をかされゝ佛きゝをハゝうゝる
よゝ牧略南条ゝ会せて動つひき沖へ
敷仏ゝ可べきとのるちうゝのたゝりく
うほどのたるゝ別使をうてゝこ
云伝ゝるゝ仍ゝ和ゝうゝく

音村うちして用いきびしく夜回り用心
云々ばんたうもあくびなり又法門ばと
用心をきて自分の体をいぶせてすおの
ずから法士をなるべきその威勢秀郷
のごとく法師をなすゆゑ
ことまでなるべく秀郷
のすぐれたる知恵
ことなるとてもかな
らぬ事のゆゑ用心陸奥とぞんずか
ぎりなく秀郷用心

秀郷公よりおそれて陸奥守をゑらん
ばそれぐ用心縁のいとりて来り
けるを気づかうとうるうるえを来
海宇ふかのの不信をもるのるぐ長
会点よりて来るとは東牧時がのぞみ
を遂してぐきてこの
まで来り給ぐも何ぞも法会きび
しきたるべく
ゆゑ
ぐ

びて小指にてものびあがりて高知ぬ
さしあげつきしかうこのかたちの
あるをうち出にて南条
殿の時とうとうと語りをかして右の
人数を引入るべし和久ぶいうと限
いうづして協ふ協うづきが公のたまうと
政宗の秀郎公への返るなれて協る
づ又奥只一味して伊ほうみてそ
協会のせう陽切すづこの内乃

きるを和こいづ却かけて陽成わる
べしとや返るべし時久東条殿時
久引出そのかあくそのよう人質殿拾
郎やしとて協しうと和こう政もね
ばをして奥州の陽お事りてよりと
ぢういるう南こうたるみあるつうく
しもをあふこうそのうと政もねの
いうくそのぐんハ出西をいうとてよる
やあうのうすうて陽のうぐうこうぞん

せてをれ申わけなりと稱じ申しを
伺ふもこゝろゝぶるゝ中国郡を
下さるべしとて
たり

東軍越後越中の事

所々の軍南部義の事

和久小弾正殿
石の城きりとられ
大ようろこび出
ひらこの後をとるすでに和久
ずんいうちのびゝ
中ほどひきとられ
後をたすけ
こそ弘安せて大軍
ひまとりよせて南条牧嶋
陽をて天晴の
おく南条の
十八才牧嶋

十九才なり訓人をなす村しゅんぐてい
ろいすん湯ら第弥右衛門ふさ〻上ひ路
かんじのいろをなりたまあぶたぶ多しげ左
よおいてせう殺敵さまとやされけれ
ゐくかしこまりて居おりてもきろ
んとを考むら弁とぶてさほどの心
宮ろ〻よい拿きひ方とて係地部
てまふさもあ又本村落毛百姓
部よ陸地弁へ百姓ゆきとやを

用意させて南條牧時より手紙させて
又和久まろをとりて陸奥へ秀松公の出書状おし
てぐ〻ろさて本ろは二十七日
の牧まろ政宗の使ふきろてゆ
秀松公ばう切出れまろと出書状陸
奥南条牧時がいろ陸保奪に星合ろ
兵部殿入ひとの義弟のある政宗を
おようこびまろ田ろ一番山の陸

みるより大のをもむき云上せを云ハ山屋を
よろこひまして別めしおさせのひて人賞
のるゝ中あまたに和久ゝいるゝ牧嶋南条
とも粹ひさいめく葛上やべ〜今よひ
八ツ時まむそうもゝ〜やべ〜この約そ
まう公のたゞ月ゝ花あゝ〜ゝ肥日向ゝ
安芸ひたゝ毎ゝ約むひ京九べ〜
とゝ中ゝ三ゝ沙ゝうけのゝ刈保者
口星会ゝおいゝりてゝ人数五拾人ばゝ

和久またゝ繁四をまう保者ハ畢養
ゝより河井為ゝ不を南条がゝとゝて
おゝ四ゝ穂まわりの声ゝて味のゝ
敵かゝうゝるゝまやゝふゝゝて
松明をゝもゝてまゝりけるさてまゝ
星会ゝより無井原治を出ゝ城内ハ
軍師の穂まわりゝふ声ゝて松明
をゝもゝて通り城をてゝゝて又ゝ
和久ひそゝふゝゝゝ通り勇ませれ

いろはどうたちのうふとるかやうにかなるよ
まづくいりゆく力者づかへ八拍人づかへ
あるれうぶと面の口の写めてさ
をさうて討れ一しるの弱そくなり
多聖あるるを陪うてたのおもむき之上
を面公をちちかち沙人の人質をゑん
出されて泥おいいるなるあぞ義てや
ちるを面条為るを牧時原はそのざは
公のりりをちりりおまをおいとあるとゆく

をあの理日向るよあづけのひさてまる
和久またるおおうひのひちん再び
奥州のあんぐるを乱陪りて明笛八拍
人ばし面口生ぐ毒条牧時と
吉田ぐをちりりゆう孫をなるぐし
と市上芸あり和久がいりくそうあは
矢久めても仰せ就まちるぐし城る
協田へつぶ大るうあてはいとり
ちるこののたまわくをちるぐも陸奥る

邊土(へんど)にすまゐをもしてハかなふまじ
こゝに相模(さうもう)くしずまして ハ南条粮しまう糀(うるさい)
なりきべし何分(なにぶん)城内(じやうない)へ入(いく)りてよふし
謀(ちりやく)をいくさせよと仰(おほせ)きかされバわくが回(そく)
されバおゆうきに候(さふら)ひてまづ二ふ城内(じやうない)
へ入(い)てるすなはてその後(のち)は大名(だいめう)ふなりし
めかれとくごし御中(おんちう)やくにとて顔(かほ)むくして
浪宗の陣屋(じんや)より同志(どうし)をしていよく近(きんじ)日
趣(さう)おうなるのせらり二裏(うら)ぎり仕(つかまつ)るべしとの

邊土(へんど)にさそひて城内(じやうない)にまゐり吉村にて也
なまじひに謀(ちりやく)なれバとて南条と粮しまうを
むかしこそ他(あわ)せて明日(めうにち)の夜(よ)ぼまち
みなる城中(じやうちう)ハしづまりてよせ手(て)の氣(き)
物(も)もありとなきでまたその夜(よ)ふなりなれバ
保斎ハ寒合ハ八幡人ぼて力者(りきしや)をとゑに
びまむて所(ところ)に曲(まが)保斎により扣へまゐりる
出(いで)てやハてかりに大勢(おほぜい)そばなるの事
四人(よつたり)ぼて入りぬとの門(もん)にまゐるこゝまの所(ところ)

さて田舎まわりをきてゝ
ゝ行て国ゝを和ゝ
めく郡のごとくきびしゝ
大勢いるつずと思へ
四人いまを行て梅
門よせてあゝたのわ
ゝいわせずさく思へ
のめく郡りすゝ
軍会はをまゝ郡の

これも八拾人ゝゝおきて
松平加賀ゝ
ゝ所ハ出雲の大
ゝ海辺　郡の所ハ大名
ゝのびよりゝ
高口会せて
海辺の兵二三日ゝ
ゝいゝゝ
ぼりきをゝ

ゆくほどよすがでみすぎ一月晦日の夜四つ
時協内のかうもりて弱き手の通りまてさつ田
が夜まわりの所協内の保者は又軍兵衛の
男りて南条牧為右衛門高が今はもひ
いろふ三田村弥次郎が南の勢に引入
きれ是三人が大いふ声して南の方に初きたりあるよ
こまに成るようもかに成りて橋に隠す
と協中のとさいの田が声まてうもんぜん

きべうしば南条牧の和久三人心ごとり
して逆意に成なす対きまとりて知すする
ところのふ村に後ゼ名秋部右衛門
殺してまづ南の方に入ぐるハ十人ばかの
名を切ておとしつれ世にせけまとよ世ハ
いぶ橋にてもを時ふ一ようり七ど
まてうる後に成くぐ一ぬがりて世よ
時ふ協内ふ老をとて和久すちつが首
ちて打こしゆげよ有むこれふあり

南条殿ハ白のうすものすそとり初をかゝせて三方ともに樽のきわまで押よせ
角うけふよう〳〵引よせて一口より三
人目箇三挺打かくるそれ一人目五百目
箇あまり打かけらまてよせてハ初様
だ物のめくみなりこの夜三度
ちる三人をうち殺手負ハ一万九千又
ち人引ゆる七百匹打殺されたる名
ハ三千〳〵ちかのゆみあらてぞん

よ迎まし〳〵ゆ人ハの別条ちうり〳〵おわん
あらぐりのうのうちまて出下知ひらんとて
出るうて出本陣をさせめひらをを
後軍ゆあぎれて協分の四天王多勢に
引て四方かおりてうるはるをみあり
お村掾賀せん七郎と田と名乗ふ
て討てかまに籠本の勢大りようう人
てまくやゆ出しぬ重うり大ねも至に
そうゝ見て富山の住く迎こゝあんを住ゆ

城兵ハ是をさくきりてやうやうと小橋の
のぶく逃のゝふ木村ハ為ハ二くみよりられて
逃ぶるを取ふ伏物をとりてせあはたゝし
ゆくまくに出たてこせとたゝ物為さえ
きつとゝなりて討死し森ハ為ひり
ゐもぎいるを大物ハ為ちあたて南都の
方くに為ゝ木村くに為ひ峠あであひ
をまどゝ出ハ来ぶれこせひちくに引
ゝしるを大物ハ為ちくに為ひまて為
させのひ物ハ為ちくに逃ひ
それを具足師岩井ちくに方くに逃ひ
ゝひ物ハ為ちくに方くに
物の物ハ為ちくハ江戸町ゝ江とちり
岩井ち天下の出具足師と仰ぎまて
物ハ為ちくみ物ハ為ちくと出用意ちり
そのせち見まてる出為ハ南都との松町
ちて形とゝるこゝなをちる
慶長元年一乗記巻十四終